

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和 年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価（3月25日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①「主体的・対話的で深い学び」を通して生徒の資質・能力を育み、生涯にわたり探究を続ける未来の創り手を育てる。 ②すべての教科・科目で授業のユニバーサルデザイン化を推進する。  ③知・徳・体 にわたる「生きる力」を育む教育課程を編成する。	①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、組織的な授業研究に取り組む。  ③豊かな人間性や社会性の涵養、社会的・職業的な自立を目指した教育課程を編成し、適切な運用を行う。	①学校運営協議会に授業研究部会を位置づけ、校内研修等で、組織的な授業改善やユニバーサルデザイン化を進める。  ③今年度、新教育課程の学年が卒業年度を迎えるため、3年間を通した見直しを実施する。	①学校全体での組織的な授業研究、成果のまとめ、振り返り等を実施したか。  ②新学習指導要領に則り、高等学校3年間を見通した教育課程を編成することができたか。	①校内授業研究テーマに沿った授業改善のための相互授業見学期間を設定し実施した。  ③新教育課程の見直しを実施し、令和8年度入学生に向けた教育課程の再編成を行っている。	①相互の授業見学に対する意義を感じながらも十分な時間を確保できない状況を踏まえ、研究内容や実施時期について今後、検討を重ねる必要がある。  ③令和8年度入学生に向けた教育課程の適切な運用が行われるように整備する。	・授業改善については、引き続き取り組んでほしい。 ・小・中では保護者にアンケートを行っている。 ・主体的・対話的な学びや生きる力は社会総がかりで関わることでより成果が大きくなる。	① ICTを活用した授業実施については、かなり充実してきたが、一方で職員の間の差が大きい状況がある。授業研究については、内容・時期等について検討が必要である。  ③ 生徒の進路実現を目指した新教育課程の見直しを行い、令和8年度入学生に向けて教育課程の再編成を行った。	① 次年度は生徒による授業評価だけでなく、Classiで行う保護者アンケートの結果を授業研究に活かす。ICTの活用について等の職員研修や授業見学について、再検討を行い、学校全体での組織的な授業研究を進める。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①一人ひとりの心と体の成長に配慮し、他人も自分も大切にできる思い合う態度を育てる。  ②対話や協働を通し、生徒同士が相互理解を深める、インクルーシブな学校づくりに取り組む。  ③学校行事、部活動等の生徒会活動を活性化し、生徒の主体性・創造性を育む。	①チームによる相談体制を確立し、自他ともに認め合える人間関係の醸成を図る。  ③委員会活動を活性化し、生徒が主体的に行事の企画・運営を行えるよう、支援する。	①サポートドック、自前の「心の健康調査」等を活用し、自身を見失っている生徒を早期に発見・支援する。  ③学校行事等、生徒が企画・運営に携わる場面を増やす。40周年記念事業を通して生徒の創造力を発揮させる。	①SC、SSWの利用状況。職員のための研修会等を開催することができたか。  ③生徒の主体的な活動の場面が見られたか、生徒の創造力を発揮させる40周年記念事業を実施できたか。	①SCによるカウンセリングは33日延べ158人。SSWによる教育相談は34日延べ41人。県指定、職員人権研修として、同和問題についての研修を行った ①インクルーシブな学校づくりを目指し、相互理解を深める活動を実施したことで、生徒個々が互いを尊重し、理解しあう意識を持つことにつながった。  ③体育祭、文化祭とも実行委員を中心に生徒主体で企画・運営ができた。また、40周年を祝う会において、ゼロから企画を立ち上げ、事前準備も含め、成功裡に終わらせた。	①全職員に対する校内教員研修の充実を図る。引き続き教育相談マニュアルを作成するなど、教育相談体制の充実を図る。 ①インクルーシブな学校づくりには、継続的に改善していくことが必要。学校全体で協力しながら、「対話・協働・体験」を通じ、多様な生徒が共に学べる環境を目指していくことが今後も求められる。  ③昨年度の動きを、担当者の記憶や、バラバラの資料から探ることが多く、合理的ではないため、今年度の振り返りと、来年度の引継ぎ資料の作成を行うとともに、来年度の計画についても委員会での議論を進めておく。	・SC、SSWが活用されていることはよいことであると思う。 ・サポートドックによる声かけの重要性を感じる。 ・学校、生徒の取り組みを可視化することで理解が深まったり、協力や支援が得られると思う。	①教育相談茶話会を毎月1回開催することができた。若手教員が増える状況下で、校内教員研修のさらなる充実が必要である。  ①インクルーシブ教育に関するミニ研修を月1回実施した。インクルーシブが学校づくり取り組みのために職員全体の取り組みが引き続き必要である。  ③各行事において、実行委員や有志団体など生徒が主体的に活動をする場面が多く見られたが、企画検討の段階で毎年、同様の議論をすることが多いため、単年度で終わらずに、次年度につながるようにすることが課題である。	①サポートドックによる生徒への声かけを引き続き行っていく。 ①SCやSSWによる職員研修の開催し、教育相談体制の一層の充実を図る。 ①職員の異動も多いため、インクルーシブ教育に関する職員研修の充実を図る。  ③実施後に振り返りをおこない、次年度への引継ぎ資料の作成を行うとともに、年度内に次の計画についても検討を進め、スムーズに次年度をスタートできるようにする。
3	進路指導・支援	①生徒一人ひとりの社会的・職業的な自立に向けた進路実現を目指したキャリア教育を行う。  ②インターンシップ等体験的な学習活動を充実させ、組織的な進路指導	①様々な学校外の教育力を活用し、個々の生徒の意識を高め、進路実現に向けた取組みを推進する。 ②生徒の進路実現に向けて職員全体で組織的な支援を行う。	①授業やホームルーム活動等を通じて生徒を支援する。学習ツール等の利用を促進し、将来に向けて広く考える支援をする。 ②生徒の進路実現に向	①学習ツール等を利用して進路についての意識を高めることができたか。  ②生徒が希望する進路を実現するために自分の行動や考えをまとめ	①個々に所有しているクロームブックを活用して、授業や自己理解、進路研究等を日々進めている。また、学校外の教育力を活用して、進路について考える機会を持つことができた。 ②各学年、生徒の置かれてい	①様々な機会を通じて多くの情報を発信しているが、学期の早い時期から次年度の進路について考える必要があり、生徒に実感を持たせることが難しい。きめ細かく、繰り返し情報を発信し続ける必要がある。 ②進路行事を実施した後に、毎回	・生徒の自己理解を進めていることはすばらしい。自己肯定感を高める取り組みを今後も続けてほしい。 ・特別募集の生徒の全員が進路を決める	①生徒がそれぞれ自己理解を深め、希望する進路実現に向けた継続的な活動を支援できた。学習ツール等の活用がまだ進んでいない。	①クロームブック等のさらなる活用をすすめる。

	視点	4年間の目標 (令和 年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価（3月25日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		や支援に取り組む。		け、さまざまな場面できめ細かく支援をする。	ることの必要性を意識するように支援ができたか。	る状況に応じて、進路担当が支援をすすめており、生徒の自己理解が進んでいる。特に、3年生については、個々が希望する進路に進むことができるよう、きめ細かく支援をすることができた。	振り返りをする時間を設定することで、さらに自己理解が進み、進路実現につなげていく。	ことができたことはすばらしい。 ・体験的な学習では地域で支援できることがあると思う。		
4	地域等との協働	○保護者や地域と連携し、社会に開かれた学校づくりを推進する。	①ホームページや学校見学会・学校説明会などの広報活動において、本校の特色や魅力、幅広い教育活動を的確に発信する。	①ホームページの内容を精選して情報を適宜発信できるよう、計画する。学校説明会等では生徒主体の取り組みや成果が伝わるよう内容の充実を図る。	①他のグループや広報委員と連携をとりながら迅速かつ適切にホームページの内容更新を行うことができたか。また、本校の特色や魅力、幅広い教育活動を効果的に伝える学校説明会等が実施できたか。	①学校見学会や学校説明会、校外での広報活動、ホームページにおいて本校の幅広い教育活動を積極的に発信した。学校説明会では本校の魅力や特色を代表生徒が中学生や保護者に向けて具体的、効果的に伝える形式を新たに取入れた。	①ホームページの内容更新が滞ることもあった。スムーズに情報を発信できるよう、他のグループや広報委員との連携を密にする。説明会などの広報活動は限られた回数や時間の中で特色や魅力を効果的に伝える必要があるため、内容の精選を図る。	・地域連携によって、生徒には社会性の学びがあり、地域では学校への理解が進むので、引き続きの連携をお願いしたい、 ・中学生と高校生が連携する機会を作ることが大切だと考える。	①広報委員作成の記事を継続してホームページに掲載した。説明会では、代表生徒が中学生や保護者に向けて、本校の魅力や教育活動を具体的に伝えることができた。一方、見学会や説明会などの内容や実施時期については、年間スケジュールの中でバランスを取りながら検討する必要がある。	①年間の広報日程を早めに確定し、職員や生徒が協力しながら準備を行い、説明会や見学会が中学生や保護者にとって有意義なものとなるよう内容を検討する。
			②地域への貢献活動の場を提供する。	②地域関係団体との連絡を密にして、安心・安全に配慮しながら貢献活動への積極的な参加を促す。	②地域関係団体と連携する取り組みに生徒が積極的に参加したか。	②地域貢献清掃活動を春・秋の2回実施し、地域団体の方々と本校生徒が協働する機会を設けることができた。また、地域イベントの「フェスタとらいあんぐる」や「湘南台まつり」に参加した。	②地域関係団体との協働の機会は増えていない。地域との交流や貢献活動、イベントについての情報を周知し、積極的な参加を促す。		②40周年記念行事準備委員会と地域への貢献活動を行った書道部が県教育委員会から表彰を受けた。 ②地域貢献清掃活動や一部の部活動ではあるが、中学校、地域との交流を行うことができた。しかし活動について、あまり知られていないことが課題である	②地域団体や小・中学校との連携をさらに進め、交流の機会や参加可能なイベントなどについて生徒や部活に周知し、参加を促す。また、本校への理解が深まるよう、活動の様子などを積極的にホームページに掲載する。
5	学校管理 学校運営	①誰もが安全・安心して学習活動等に取り組める教育環境を整備する。  ②ワークライフバランスの実現のため教員の働き方改革を図る。	①生徒も職員も活動しやすい環境を整備し、必要な各種改修工事を進める。  ②ワークライフバランスを意識した働き方を進め、職員のコンプライアンス意識を高める。	①日々の清掃活動を充実させる。また、老朽化施設等の点検を着実に行之、必要な更新を行う。  ②外部人材の一層の活用や職員の意識改革を促し、時間外在校時間を縮減する。事故不祥事発生 of 要因について職員間の情報共有を図る。	①清掃状況の確認。危険箇所、老朽化箇所等の早期発見と適切な対応ができたか。  ②効果的な研修等を実施することができたか。職員の時間在校時間の縮減ができたか。	①日々の清掃では美観意識の向上もあり、十分な活動ができた。 ①年間を通じて、事務室の素早い対応により、経年劣化した備品、施設等の修繕等ができた。  ②毎月の研修により不祥事防止に対する職員間の情報共有を図った。 ②時間外在校時間の長い職員について、その縮減が難しかった。	①これまでの清掃活動を続けていく。  ①これから、老朽箇所等については、安全を確保しつつ適切な改修等をしていく。  ②地域の支援等ももらいながら、教員の働き方改革の推進により時間外在校時間の一層の縮減に取り組む。	・先生方の負担がかからない地域からの支援方策について知恵を出しあっていたと思う。	①生徒たちの積極的な清掃活動により校内は、清潔な環境が保たれた。 ①事務室との連携により、経年劣化した備品、施設等の修繕等ができた。  ②職員への事故防止の意識醸成ができた。  ②働き方改革について、職員意識の醸成はできたが、一部の職員の長時間労働についてその縮減が難しかった。	①今後もこれまでの清掃活動等を継続し、清潔な環境を維持していきたい。 ①今後も、生徒の安全のため、教育施設課等とも連携し、適切な改修を進める。 ②不祥事防止に向け高い意識を醸成する。  ②職員の働き方改革の一層の推進による長時間労働の縮減に引き続き取り組む。